

はじめに

前著『治療に活かす！栄養療法はじめの一步』は、慌ただしい臨床の現場で即戦力となるような栄養療法の知識や知恵をまとめたものであった。医療現場では、目の前の患者さんを早く治すために栄養の知識を毎日必要としているにもかかわらず、ほとんどの医療従事者は、学生時代を通して、また社会人になってからも、栄養療法の体系的な学習に取り組む機会があまりない。私自身そのような状況に悩み苦しみながら仕事をしていたことが、前著をまとめようと決意する動機付けとなった。

現在では、主に研修医やNST委員会の新メンバーに対して、前著を栄養療法の入門書として使ってもらうように勧めている。しかし、前著に入門書以上の役割を持たせるのは難しい。前著を使って栄養療法を学んだ研修医が、実際の現場に出て栄養療法を施行しようとするとき、現実を見て立ちすくんでしまうことがある。臨床の現場で実際の治療として堪えられる栄養療法を行うには、もっと深い知識や知恵が必要だと感じるからである。

そういった現実直面して、栄養療法を深く追求した本を読もうとすると、生物学、生化学、生理学などの基礎医学の情報が散りばめられている文章を目の当たりにし、今度は本の内容自体を理解するのが大変なのだと思付かされる。

つまり、栄養療法は実践するのも、深く学ぶのも非常に困難なのだ。このような状況を打開するためにはどうしたらいいか、と考えるようになった。

本書は、「どうして病院の栄養療法は難しいのか」という問いに答えることを中心的なテーマとしている。多くの時間を費やして栄養療法の勉強をして経験を積んだとしても、おそらく得体の知れない難しさがずっとまとわりつき続けることだろう。難しく感じるのはそれなりの理由がある。それをひとつひとつ分析して、できる限りわかりやすい形で提示した。実際の患者さんに向き合い、効果的な栄養療法を行うために必要な知識や知

恵，そして，栄養療法に詳しい本や論文を深く理解するのに必要な情報を本書ではまとめた。

前著とは異なり，生物学，生化学，生理学，免疫学などの基礎医学の領域として学ぶ知識も多く記載した。広範で複雑な基礎医学を学び理解するのは困難を極めるが，効果的な栄養療法を行うにはこの領域を無視することはできない。しかし，あくまで栄養療法を実践するために必要な基礎医学の知識を盛り込んだ。やはり実践を前提とした情報でなければ本書の価値はない。

本書を書くにあたって，医学部を卒業して以来，9年ぶりに基礎医学の教科書を改めて買い揃えて学習し直した。ある程度の臨床の体験を積んだ今の視点で基礎医学を学習してみると，栄養療法を行うために有用な情報であふれていることに気が付くことができた。忙しい臨床の現場に従事する医療従事者に基礎医学のなかにひっそりと佇んでいる有益な情報を紹介していくことも本書の目的の1つである。

最後に，本書はNST委員会がチーム医療として栄養療法を行うためではなく，一個人の医療従事者が栄養療法を深く理解し，実践するための手助けとして書いた。栄養療法に深い洞察と経験を蓄積した医療従事者が増えることでしか日本の栄養療法の質の向上は望めない。やはり各個人のレベルアップが何より重要である。

本書により，ひとりでも多くの方が栄養療法のさらなる深みを感じ取り，毎日の試行錯誤の糧となるのであれば幸いである。

2014年2月

清水健一郎